

パネルディスカッション

「日本の保健医療ここが好き、ここが苦手！」

パネリスト

ハ・ティ・タン・ガさん (NGO ベトナム IN KOBE)
ヴァンダ・ナカムラ・タバリ (関西ブラジル人コミュニティ)
尾上 皓美 (くろーばー)

進行

北村 広美 (多文化共生センターひょうご)

1. 活動の現場から

ハ・ティ・タン・ガさん

私は NGO ベトナム IN KOBE の代表をしています。活動としてはいろんなことをやっています。ニュースレターの発行や、麻薬防止の関連の啓発資料をつくったりしています。(活動は)非常に忙しいですね。ほとんど毎日、(1日あたり)4、5人は相談に来られます。それから電話相談が多いときは20人くらいからありまして、追われている毎日です。



ハ・ティ・タン・ガさん

(今日のテーマである)医療に関する話ですが、命に関わる問題であって、私のところもできるだけ一緒に力を合わせてやってきました。医療機関への同行通訳はこの1年間で80件ぐらいありました。そのうち高齢者の同行通訳(訪問)は50件くらい、それ以外の若い人でもう20件ぐらい、さらに、麻薬関連の同行通訳もやっています。あわせて80件くらいですね。

ベトナムと比べたら日本の医療はすごく進んでいるんですね。わたしはあんまり文句はないですね、ほんとに日本の医療はよくできて、すごく優れているなと思う点が多いです。

欠点というのは、通訳がついていない部分はほんとに欠点かと思いますね。かかわればわかるほど、深刻さがわかって、必要性はすごくある(ことがわかります)。でも、医療機関のほうは、全然そんなこと認識してない。ボランティアにまかせっぱなしということは多いと思います。

ベトナムの医療はすごく悪いですね。保険はあまりきかないんです。公務員には(保険は)あるんですけど、一般市民はほとんど実費で払ってしまっていて、病院側はお金がないと全然何もしてくれないし、賄賂をはらわないと世話してくれないし(笑)、そういう悪い点がすごいあります。

日本が取り入れてもいいかなあと思うところは、ベトナムでは入院したらカルテがないんですよ、ほとんど。たとえばレントゲンを撮った後には、そのレントゲン(の写真を)自分が保管するんですね。だから、違う病院に行っても、これは前に撮った自分の写真です、と言って渡す。そういうところは、日本もまねしてもいいところかなって思っています。何回もレントゲン撮るのはあまりしない。結果を先生に見せて、そこから続きをやってもらうのは、いいところだと思います。

私の父の場合でお話したいと思います。父はC型肝炎になりまして、8年間くらい入院してお世話になったのですが、レントゲン(写真)とかも全部自分で持って、管理していました。ベトナムの場合、入院しても、はじめに診察してもらった医師に来てもらうんですね。でも先生手ぶらなんですよ。だから、前の情報見せて、それに沿って医師に話してもらうことがよくあります。薬も自分も管理します。医師が情報や処方全部くれたら、薬局まで買いにいけます。で、たとえば4日分の薬が出されていても、お金がない場合は「1日分だけください」って言って買うこともよくあります。また診察したときは、「あの薬出してください」って頼んで、注射してもらうことがよくあります。

でも私は(システムを)よくわかってなくて、注射の薬が出されたときに、先生に「注射器は？」って言われて、「え、注射器買わなあかんの」って(笑)。ベトナムでは注射器も針も自分で買わなあかんのです。実は。そういうことはあんまり管理してない。なんかホントに、(データも物も)残ってない。全然残ってなくて、そのデータを自分で管理させて、それで手術を受けることもあります。

一番大変だったのは、12月頃に父が意識不明になって、私が(診察を)頼みに行ったら、「もうつれて帰っていいよ」って言われた。あきらめてくださいって。でも母は、「できるだけ、せめて子どもが帰ってくるまで、とにかくおいてください」って。そのとき何で入院したかという、父が血を吐いたんですね。良く分からないけど、どこか切れて血を吐いたと思うんですけど。そのとき、先生からの説明を聞かないんですね。先生からの説明は一切ない。だから、なんで吐いたかわからない。病院に運んだ時点でもうあきらめて、治療しないんですね。でも、不思議なことにお父さんはだんだん元気になったんですね。私は、それから2週間後に日本に戻ったけど、その時点でも結局出血の理由は何かわかってない。そういうことがすごく多いですね。どうしてこうなったかほんとに説明もなくて、あきらめてたのに、お父さんはだんだん元気になっていって、「画期的やな」と医師が言うくらい。でもその原因は何かわからないんですね。

ヴァンダ・ナカムラ・タヴァリさん

関西ブラジル人コミュニティの活動では、(ブラジル出身の)子どもたちに、ポルトガル語とか日本語を教えます。日本で生まれた子どもは、ポルトガル語を全然話したり書けたりしないので、それを土曜日に教えます。またイベントなども神戸でやっています。

私が日本に来てから、16年目になりますけど、やっぱり日本語はまだ完璧じゃないです。だから、シンプルなことばで今日はしゃべらせていただきます。

習慣の問題で、やっぱり、日本に住むことは難しいです。病院ではもっと難しいことがあります。ことばの問題が一番なんです。そのことをちょっとお話したいと思います。

病院に行ったときは、まず、何かアンケートみたいなもの(注:問診票)をもらって書きますが、その読み書きができません。そして医師の診察のときも、やっぱりことばが問題になって、そのとき通訳と一緒にいてくれたら、患者さんも医師も安心と思います。病気の内容とかを、担当医が説明できて、患者さんに伝えることができます。

ブラジルでは、診察するときは、患者さんは医師と看護師の3人くらいで(他の人に聞こえない環境で)お話ができますね。日本の病院ではちょっとその点違いますね。診察で医師とお話するときは、カーテンで仕切られるだけで、外におられる方にも会話が聞こえるので、話しにくいです。

そして保険のことなんですけど、国民保険とか、知らないブラジル人が多いです。(保険に未加入で)病院に行ったら、その分、個人で費用がかかりますので、すごく高くなります。今はいろいろなコミュニティ(の情報誌)とか、新聞とか、雑誌にポルトガル語で保険の大切さについて書いてあります。日本に長くいる予定だったら、特に小さい子どもさんのいる家族は、絶対、保険に入ってほしいと思います。それは私たちがコミュニティでもよく話していることです。

医師から病気のことについて説明もらうときはね、難しいことばを使わないようにして、簡単な日本語で、説明するようとか、ボディ(ランゲージ)、例えば胃が問題だったら胃のところを直接見せるとか、手術するんだったら、ここをこうするとか、ちゃんと説明したらわかりやすいと思います。ポルトガル語と、日本語はなせる通訳でも、(ポルトガル語話者は)あまり読み書きができません場合があります。その時はまた困りますね。

ブラジル人が働いている会社の知り合いの日本人の方と一緒に、何回か病院に行ったことがあるんですけど、その方はポルトガル語は話せなくても、医師から(日本語で)よく説明を聞いて、そしてブラジル人の方に、シンプルな日本語、わかるような日本語で説明してあげるのね。薬の飲み方とか、薬の種類も、全部説明してくれますので、そしたら、ブラジル人の方も安心して間違いないように薬を飲む。

もうひとつ私の経験からお話します。ブラジル人の女性の方で、卵巣のところで妊娠していて、それが原因で出血して救急病院に運ばれました。それで手術したんですけど、その時その方は全然日本語を話せなくて、旦那さんが私のところに通訳をお願いしにきたので、一緒に行ってあげました。手術が終わってから、「一晩だけ泊まってください」って言われたので、ブラジル人の方やし、一晩泊まりました。何かあったら病院の責任といっても、コミュニケーションが取れなかったら大変なことになるからと思って。そのとき思ったんですけど、病院の中で、いろいろな専門科(注:診療科)がありますでしょ。それがアルファベットで書いてあったら、わかりやすいですよ。全部漢字で書いてあるから、どこが内科か、とか、どこが産婦人科か、わかりません。大きな病院は書いてますでしょうか。それが私たちには困ります。

(北村コメント:書いてあるところと書いてないところがありますね。大きい病院だから書いてあるというわけじゃないみたいです。小さくても書いてあるところもあります。)

関西ブラジル人コミュニティの活動についてお話します。イベントは6月に、フェスタジュニーナというのがあります。伝統的なダンスとか、料理、なつかしい料理を作ったりします。毎年、6月24日くらいですね。(日系ブラジル人は)兵庫県にはそんな多くないですけど、静岡県とか、愛知県は、ほんとにたくさんのブラジル人が出稼ぎに来てます。向こうはブラジル人が多いので、今はブラジルの学校もたくさん増えました。そして日本の学校に通えない子ども達はやっぱりブラジルの学校に行ってますけど、でもその点ちょっとブラジルのシステムでポルトガル語で教育をする。もちろん日本語も教えてます。



ヴァンダ・ナカムラ・タヴァリさん

尾上皓美さん

よろしくおねがいします。くろーばーは、外国人の女性のための相談機関で、大阪市内で事務所を持っている団体です。主にドメスティックバイオレンスの被害者の支援が多くて、外国人女性からの相談、年間300件くらい受け付けているんですけども、DVを含む離婚の相談や、在留資格の相談、子育てに関する相談などがとても多いような内容です。相談者の国籍別に見ますと、フィリピン人が一番多くて、次が中国人ですね。日によって多少差はあるんですが、フィリピン、中国の方で9割くらいをしめていて、その他の、韓国、ブラジル、ベトナムの方、ペルーの方、色々あわせて1割くらいという感じになっています。くろーばー以外に、中国語の通訳を個人でしていますので、くろーばーにはかかわってない方にかかわることもあります。

日本に来ている中国人の方には、すごくいろんなタイプの方がおられるんですね。中国人とひとくくりには言えないくらい違いがあります。ひとつは、国籍は日本の国籍を持っておられる、いわゆる残留孤児の方ですね。だいたい日本で2500人くらいいらっしゃるんですけども、戦争のときに中国に置き去りにされて、中国の養父母に育ててこられた方達、その方達は、生きておられる方は、日本国籍をもっておられて、名前も日本語、日本人の名前なんですけども、中国で生活されてきたのが長かったために、日本語がほとんどしゃべれないです。中国の中でも、貧困地域で育ておられたり、養父母にあんまりいい扱いをしてもらわなかったりしたために、教育を十分受けておられない方も多いため、中国語でも文法的に正しいことばがしゃべれないとか、読み書きができないという方もおられます。それから、日本人の高齢者の方と比べると、相対的に体が悪い方も多いですね。経済的に貧しいところで生活してきたとか、重労働をしてきたからとかという理由の他に、文化大革命のときに、日本人の血をひいているということで迫害を受けて、監禁された方もお

られましたし、そういうことがあるんじゃないかと思います。そういう方たちから話を聞いていますと、やはりことばの問題が一番大変で、病院に行くときに一番困るとおっしゃいます。経済的に困窮されて生活保護を受けている方が多いので、病院に行ってもお金はかからないんですけども、それでも、日本の病院には、なかなか行くのは怖いって言われます。中国に帰国をしたときに、中国の医療機関で診てもらう方もおられますし、中国から薬を送ってもらって、それでしのいでいるという方もおられます。病院に行くと、筆談で何とかなるケースもあるんですけども、特に帰国者の場合は、中国では日本人だということはいじめられて、日本に帰ってきてから、日本の国籍を持っていても、中国人だということ、差別的な体験をしているので、病院に行くと日本語がわからないというのが恥ずかしいという気持ちが強いですね。「なぜ日本人なのに日本語がわからないの」って言われて、全部わからなくても筆談などで何とかやってもらっているときに、「はい」って言うてしまうことがあります。そんなときに本人は不安感を抱えている。怖いから薬を飲まずに、中国から薬を送ってもらっていることがあります。



尾上皓美さん

それから、国際結婚で来られている中国人の方、これは女性の方が圧倒的に多いですね。日本全体で国際結婚の割合が6%くらいなんですけども、そのうち中国人がかかわるケースは、夫が日本人、妻が外国人という国際結婚のうち、35%で、一番多いですね。二番目がフィリピン人で31%です。中国から国際結婚で来てる方の場合は、お見合い業者を通じて来てるケースも多くて、日本に来てDVを受けているケースも多いんですけども、医療機関とか、保健センターなんかで、お医者さんとか、担当保健師さんが、旦那さんが日本人だから、旦那さんに説明して、旦那さんがわかっておけば、あとは夫婦の間でコミュニケーションをとって何とか説明してくれるだろうと思われているみたいですけども、旦那さんが中国語ができない、夫婦の間で十分にコミュニケーションが取れていないこともあるので、旦那さんがわかっていても、ご本人は全然わかってなくて不安に思っているということもあります。上下関係がある夫婦の中で、特に暴力があるようなケースの場合は、夫が暴力をふるって怪我をしても、なかなか病院に連れて行ってもらえないということもあります。これはフィリピン人と日本人の男性の夫婦の場合にもあります。

あと、中国帰国者の方で、教育を十分に受けてないという話を先ほどしましたけども、国際結婚で来る方の中にも、フィリピンから来る方で若い方でも読み書きできないという人がいます。ですので、日本の、みんなが教育を受けて、読み書きは当たり前になって、経済的にもそんなに格差は激しくなくて、という感覚で考えると、もう想像がつかないくらい全然差がありますね。また少数民族の方もいます。以前 HIV 感染者の方に告知の通訳で行ったときの相手の方が少数民族の方だったんですよ。その言語の通訳者が見つからないので、(北京語で何とかなるかもしれないから)とりあえず北京語で、っていわれて行ったんですが、ほとんど通じなかったですし、あとは教育

のレベルとか、本人の生活習慣の差とかもあると思うんですが、「免疫」っていうことは、これは中国でも同じ漢字で、違う発音でををするんですけど、そのことばも通じなかったんですね。そのことばが存在しなかったんですね。多分、それだけの概念がないところで育ってこられた方なんだろうなって思います。留学生の場合、交通事故が多いです。去年まで私は、中国人の留学生が多い専門学校にいまして、私が相談を受けたケースだけでも1年間で交通事故が3件あり、そのうちの1人は、トラックの後輪に巻き込まれて死んでしまったんですよ。交通事故の多い理由のひとつは、交通ルールが本国と違うので、来たばかりの人が特にとまどいやすいということと、生活費の捻出のために睡眠時間を削ってバイトをすごくたくさん掛け持ちをしていて、ひとつのバイトが終わってすぐつぎのバイトに急いで行く、睡眠不足で判断力が落ちているということもあると思います。で、交通事故にあったときに、日本の法律もよくわからないし、相手方の保険会社が入ったときにも、ことばが通じなくて困ったこともありますし、外国人だからということで下にみられて、十分な補償を得られないという相談もあります。

フィリピン人の場合カトリックの信者の方が多くて、教義上中絶が許されないのですが、日本人の男性と結婚していたり、日本人の恋人がいる場合、避妊には協力してくれないのに、妊娠すると中絶しろと言われてたり、妊娠していることがばれると逃げられるというケースがあります。無理やり病院に連れて行かれて、男性がサインをして、中絶をさせられたっていうようなケースもあり、その場合の精神的なショックが(ただ中絶をさせられるだけでもつらいのに)神さまに対して悪いことをしてしまったという罪悪感みたいなもので、ものすごく落ち込むこともあります。その点は医療機関の方にも配慮していただければと思います。フィリピン人の方も仕事で接していたり、日本で結婚したりする場合は、読み書きはできなくても、会話はかなりできることはあります。ですが、いろんな情報を持ってない人が多いですね。たとえばフィリピンはタクシーをよく利用しますが、電車に乗る習慣がないんです。日本に来て漢字が読めなくても、どこに行くにも夫が連れていってくれてたから問題がなかったけど、いざ夫と関係が悪くなると、自分ひとりでは電車に乗ることができないって言うんですね。体調が悪くなっても、救急車の呼び方もわからない。それで、夫の携帯に電話して、救急車を呼んでくれるよう頼んでも相手にしてくれなくて、それで苦しんでいたんだっていう相談もありました。

医療機関にはまだまだ外国人に対する理解とか、DVに対する理解が十分でないところもあります。一例として、ある暴力がきっかけで、怪我もしたし、精神的にもかなり深い打撃を受けて、精神科にかかっていた相談者がいたんですけども、その人が、精神科の病院に行って、暴力のせいどころなっただっていう診断書を書いてもらえませんか、っていうふうに言ったんです。彼女としてはそれが希望なんですけども、病院側から「それはできない」と言われたんです。できないならできないで、ちゃんとやさしく説明してくださればいいんですけども、「そんなことは暴力に関係ありませんよ、そんなことは基本的にできません」ってすごく冷たく言い放たれて、怖かったと言っていました。外国人であり、暴力を受けた経験があるということで、すごく傷つきやすい精神状態になっていますの

で、そのあたりの言い方はやはり気をつけていただかないと、二次被害を起こしてしまうんだらうと思います。

通訳という業務に対して、医療機関の方が十分に理解されていないな、使い方が荒いなと思うケースも色々ありました。あるとき、「入院患者の方に十分病状をちゃんと理解をしてもらいたから、通訳さん来てください」と言われて行ったんです。で、行ったら、「明日から8時間くらい来られますか」と言われて。どうも介助の人というか、付き添いをさせようとしていたふうに感じました。担当医が私に病状の説明をされて、「では通訳さん、これ説明しておいてしてください」と言ってその場を離れようと言われました。「病状を伝えるっていうのは医療行為ですから、私そんなことできません。先生もいてもらわないと困るんです」と言って、医師にもいてもらったんですけど、通訳しにいかしたら、今度はご家族の方がわ一つと寄ってこられて、「まさか、お母さんに本当の病状伝えるの、そんなことしないでよ」と通訳者のほうに詰め寄ってこられて、「先生が本当のことを言っても訳さないでね」と言うんです。何をどう伝えるかということは、通訳を入れる場合には、ご家族とか、医療機関のほうでちゃんとコミュニケーションをとって、必要であれば通訳者がそれをとりもつということが自然なんだらうと思います。また、精神疾患の方で、突然「テストの通訳をするからお願い」と言われたことがありました。心理テストかと思っていたら、ある単語を示されて、それはどういう意味か説明するという知能テストだったんです。例えば『お箸』ということばを出されたら、これは中国でも使うものなので、ご本人が中国語で説明しても私が訳すこともできるんです。でも『道楽』ということばは、日本語ではいろんな意味がありますよね。『遊び』という意味もあるし、『働かないでぶらぶらしている』という意味もある。またそれにぴったり合うことばが中国語にないので、訳しようがないんです。「こういう意味とこういう意味がありますよ」と説明的に訳すのは、他の通訳現場であつたらできるけど、このテストでやってしまうと、ヒントを与えることになってしまうので、できない。それから、『日本の都道府県はいくつありますか』というふうな一般常識を試すような内容も含まれていたんですが、日本人がその知識をもっているかいらないか、中国人がその知識をもっているかいらないか、その意味合いは全然違いますね。それをそのまま訳してどういう意味があるんだらうと思いつつ、すごく苦労して通訳をしていました。これが突然言われたのでなければ医師ともう少し相談して、どこまで訳すか、どういう訳し方をするかということ考慮して訳ができたんだらうと思います。

国籍にかかわらず、超過滞在の人というのがいます。これは在留期限が過ぎても日本に留まっている人のことですが、その理由は仕事であつたり、短期滞在などの在留資格で来日して、その間に日本人の男性と知り合つて交際したけれども、子どもができたなら逃げられたとか、結婚の約束を信じていたのだけれども、結婚しないで逃げってしまったというような形で、いつかビザがとれる状況になると信じていたのに裏切られて、でも子どもがいるし、日本で育てたいという意向もあつて、日本に残っているというような場合などさまざまです。そのような方は医療機関に行かれるときにすごく困るんですね。ある超過滞在の方で、高いところから落ちて、半身不随の大けがをされたんですが、ご本人はリハビリをしたらまた歩けるようになると思つていました。予後の告知もしなければ

ばいけないし、帰国後(注:退去強制となるため)本国の病院とどう連携するかという話し合いの場で通訳をしました。その中には会社側の方も来られていました。ビザがないと保険は使えないのですけども、労働災害の場合には、保険の加入には関係がないので、その方は労災を使って治療してもらっていました。その場でのことですが、「あなたは一生車椅子の生活です」と告知されて、本人が大変ショックを受けておられるときに、会社側の方が、「お前は犯罪者のくせに国から医療費を出してもらってありがたいと思え、おまえはラッキーだ」ということを言われたんです。そういう差別的な発言でも通訳者としては訳さなければいけないので訳すんですけども、その場に何人もおられる医療関係者の方々は、何も言わないんです。『マズイこと言うな、ひどいな』といった感じで苦い顔をしておられるんですけども、とがめるようなことは何も言わないんです。それは私にとってすごいショックでした。それはご本人も感じておられたんじゃないかと思います。

また、超過滞在の外国人女性が妊娠した場合、父親が日本人でも認知をしてもらってなければ、子どもも外国籍になって子どもも在留資格がないということになってしまって、保険に入れないんです。実質母子家庭として生活していても、母子家庭の手当て金なども全然もらえないし、お母さんが働いている間、無認可の保育園に預けて、保育料が何万円もかかり経済的に困窮します。それで病院にはよっぽどのことがない限り行かない。自分のことは我慢して、子どもが病気でしたどうしようもないときにだけ病院に行って、そういう場合は1万や2万といったお金を払って自費診療を受ける、そんな生活をされています。また(超過滞在であることがばれるのが)怖いので自分の本名を使わないでニックネームを使うということもあります。そういう状態で出産するとお子さんの出生証明書が違う名前が出てしまいます。それで、後から別の日本人の方と結婚することになったので、本名の出生証明書をもう一度発行してもらおうと思って病院にかけあうと、「ややこしいことには巻き込まれたくない」、「弁護士を連れて来い」といわれたこともありました。

このようにいろんなケースがあるんですけど、超過滞在、ビザがない人というと、犯罪者とか、すごい悪い人みたいに思われる傾向があるんですけど、そうなった経緯を聞いていくと、そもそも日本人男性の無責任さが根源であって、そのとぼっちりをお母さんや子どもが受けているだけという場合もあります。日本人は、犯罪を犯しても、それで医療にかかれないうことはありませんよね。ですから超過滞在の方だからといって、見下すというようなことは絶対にないように、医療機関の方にはお願いをしたいと思っています。

[補足]

・医療保険について(タヴァリさんのお話より)

日本に長くいるなら加入をするようにコミュニティの中で言っているということでしたが、会社で働いている人の場合、雇用の事実があれば、ビザのあるなしにかかわらず社会保険の加入者となるのが原則です。ただ、現実には、会社が保険に加入していないというケースも比較的多いので、その場合は国民保険に加入ということになります。今の日本の国民健康保険法では、外国人の加入は、1年以上の在留の資格があるものが加入資格があるというふうに規定をされています。

先ほども少しお話がありましたけれど、超過滞在の方は、今の国民健康保険の施行規則で国民健康保険に入ることができないというふうに規定されています。現実にはいろんな事情で在留資格がない状態で日本に暮らしている方は20万人とも言われているんですが、そういう人たちが病気にかかった場合の社会保障というのは非常に制限されるんだということを補足しておきたいと思います。

2. 日本の保健医療について、出身国との比較

北村(以下北) それでは、残りの時間は会場の方の質問も入れながら、今後の日本の医療や保健に関して少し話していきたいと思います。

まず、ベトナムのシステムですが、私の印象では、ベトナムではすごく家族のつながりが強いという印象があります。例えば、家族が入院した場合に、日本だったら、入院中の患者の世話をしたりするのは、普通は看護師の役割ですが、ベトナムではどんな様子でしょうか。

ガ) ベトナムでは、看護婦さんは何もしない。包帯を替えたりはしてくれますが、基本的に家族はべったり24時間ついていないとだめですね。父の場合は、朝、診察の時間があって、その後7時半から病棟の鍵がかかってしまって、それからいる人は(夜の)10時半までいないとだめでした。入るのも出るのもしない。誰かお父さんの面倒を見ないといけないので私がいたんですが、「あなた看病できないのならもう帰って」と言われました。ここに来る人は、全部看病できる人のはずだからと。でも経験がないから、看病できないじゃないですか。オムツを替えたりとか、すごく大変で、怒られてばかりでした。「汚れたらちゃんと拭きなさいよ」とか。でも父は体がすごく大きくて、重くて、できない。でも怒られるだけでなく、看病に慣れてる人から手伝ってもらうこともよくあります。

日本の看護師さんは患者さんの世話をよくしていて、精神的に疲れるのではないかと思います。ベトナムと比べると「えっ、これでいいの?」という感じ。

入院するとすぐに医師や看護師にお金を渡さないといけません。「父のことをよろしく」という感じ。病院も前払いで、薬もそのつど自分で買います。

それと、公務員の幹部は病棟が別で、設備もぜんぜんちがいます。彼らは保険ももってるし、差別的な待遇だなと思います。

北) ベトナムと比べると、日本の病院の職員は親切だという印象ですか。

ガ) 日本の病院は、すごく親切ですね。ベトナムは今話したみたいに、そんな事情だから、みんなほんとに親切だと感じます。ベトナムの高齢者は生活保護の人が多いのですが、ありがたく思っている人は多いと思います。

北) 次に、尾上さんにお聞きしますが、特に女性の場合、妊娠出産などの場面で、かなり長期に

関わるケースもあると思いますが、支援しているあいだに生まれてくる関係、支援することで日本に対する印象が変わってくるような印象をもった経験はありますか。

尾上) 医療関係ではないんですが、十分な支援ができなくても、支援者がいたということで精神的に安定したケースはあります。例えば研修生という制度があるのですが、実際には研修というのは名ばかりで、安い労働力としてこきつかわれている。労働法の適用がないので、最低賃金以下の、もっと安い金額で働かされている人も結構多いですね。その人たちは、仕事を休んだり、大きな病気があることが会社にばれると、国に送り返されてしまって、稼ぐことができないので、病気があっても我慢する人がいるんです。

一例を紹介すると、給料が事前に聞いてた額と全然違うので、それを会社側に言ったところ、暴力を受けたという人がいて、そのことに対して裁判で争ったけれども、結局、ちゃんとした謝罪のことはなくて、ごくわずかの和解金をもらって、本人達は納得がいけないけれども、しょうがないからそれで帰国されました。その人は日本なんか大嫌いになって帰っていきんだらうと思っていたんですけど、「支援者がいてくれたから、どこの国にもいい人と悪い人がいるというのがわかった」と言って帰ってくれたので、誰か味方がいるってということだけでもいいんだらうと思いました。

長浜市(滋賀県)で、去年の2月に幼児を殺害してしまったお母さんがいた事件がありましたね。最近公判があったと思いますが、あのケースも、報道から聞いている限りでは、(お母さんが)子どもがいじめられるんじゃないかという不安を抱えて、保育所に訴えたけれども、十分な回答が得られなくて、よけい不安感を募らせてしまったという背景がありますね。自分が差別的な体験をしているから、子どもも自分のせいでいじめられるんじゃないかと不安感を抱えておられるお母さんはすごく多いんです。相談者の中でも、あの事件を聞いて、「私はやらなかったけれども、でも、『夫を殺したらどうなるかな』って考えたこともあるよ」という相談者もいました。孤立感や不安感を抱えておられて、それを訴えるところがない人はたくさんおられると思います。だから『くろーばー』のような団体は、誰かの問題を解決すると、だんだんその友達がつながって相談が入ってきたりするんです。支援する場や相談できる場は、まだまだ足りないと思います。保健師さんとか、身近に関われるところをもっと増えるといいと思います。

北村) 各国での行政が行なっている保健サービスの例を教えてくださいませんか。

ガ) ベトナムにも最近保健センターみたいなのができて、予防注射とか、妊婦の健診とかも、けっこうやってますね。ベトナムはいいなと思ったらすぐ制度に取り込むんです。すごく速い。1年ぐらいベトナムに行かないと、びっくりするくらいいろんなことが変わっています。今は、子どもがすごく大事にされてます。私の世代と全然違うね。今は子どもは2人までという考えです。だから、日本のような(少子化の)感じも出てきていると思います。

タヴァリ) ブラジルも、保健センターみたいなところがあって、子どもとか妊婦さんに対するサービ

スをやっています。それで、保険のことなんですけど、日本では会社に勤めてる人は給料からの天引きで保険料を払ってますね。ブラジルでも同じですが、政府(公立)の病院に行ったときは、外来でも入院でもお金は払わなくてもいいです。

尾上) 中国は、昔の完全な社会主義だったときは、所属している会社の組織の中に学校も病院もあって、無料で(家族も含めて)治療を受けることができました。今はちょっと変わって、お金もかかるようになったと思うんですが、あまり詳しいことはわかりません。

フィリピンのは、あまり詳しくは知りませんが、日本よりも社会保障は整ってないという話を聞いています。日本に住んでいるフィリピン人の女性などは、お父さんが病気になったとかいうことで、送金をしている人は多いです

北村) 今回医療機関でお勤めの方も結構来られていると思うんですけども、日本の公的保険制度の成り立ちなどは、実はあまりご存知でないかと思います。まして外国人となると、なんとなく『保険』というものがあるみたいだけど、出身国にはそのようなシステムがあるとは限らないし、利用の仕方がわからないということで、日本の制度を生かしきれていないというところがあるかと思っています。

さて、話は変わりますが、外国人である、もしくは日本語があまりできないということが理由で、医療機関などで診察を拒否された経験はありますか。

ガ) ないですね。保険をもっていない人は、何回か連れて行ったことがあるんですが、保険があつたら、いろんな(検査などを)するけど、この人保険ないって言ったら、検査なしで説明してくれるんですね。びっくりしましたね。

ベトナムから来られたあるおばあちゃんは、ひざがとても痛くて、ベトナムで治療しても治らないので、日本に来たときに診てもらったんです。そのとき2~3万は払うつもりだったんですけど、保険がないことがわかったら、医師が「足はちょっと曲がってるんでしょ、年のせいで(骨が)削られて、それで痛いよ、レントゲン撮らなくてもわかるから、注射しておきましょう」と言ったのでほんとにびっくりしましたね。私の息子も、保険に入っていない時期に1回、転んで頭を打ったんですが、頭のレントゲンが(費用が高いので)撮れなくて、で、どうしたかと言ったら、「吐いてなかったら大丈夫」と言われました。保険がなくてもお金をかけないでやる診察のやり方があるのがわかりました。

タヴァリ) 息子が靭帯を痛めて入院したことがあります。手術説明のとき、私の日本語では不十分なので、小学校から日本の学校に通っている息子に助けられました。

尾上) 私も診察拒否をされたという経験はないんですけども、たまたまそのときだけ通訳がついたという場合、それまでの診察では医師とあまりコミュニケーションがとれなかったこともあったのか、

ここぞとばかりに通訳にいろいろ質問するということがありました。そのとき、医師が「これは長くなるな」と迷惑そうにした雰囲気を感じたことはあります。その方は、交通事故だったんですが、いつまでたっても痛みが取れないということと、交通事故との因果関係があるはずなのに、それを言ってくれないことに対する不満や、また保険会社と交渉すべき問題をそれを医師に対して訴えたり、ということもありました。

3. 会場との質疑応答

Q. 高齢者の介護について、お伺いしたいんですが、外国人に対する具体的な活動があれば教えてください。

ガ) NGO ベトナム IN KOBE の活動で、高齢者に対する訪問をやってまして、もう3年になります。薬の飲み方などは、病院では詳しく説明が聞けないからということで、家に行って説明するんですが、だいたい2~3時間かかっちゃいますね。

最初から「病気どうですか」と聞くわけにいかないの、いろいろ話をしてるうちに、話を聞きだして、たっぷりしっかり説明したりして、やっています。ベトナムのおじいちゃんおばあちゃんは、今、介護保険料を払っていても、介護保険を使う気持ちはまずゼロですね。できたら子どもたち面倒を見てもらいたい気持ちが強いんです。だから、なかなか介護サービスの申請ができないですね。要介護の認定がおりても、全く使っていない人もいました。

自分の体を他人にみせる習慣がないこともあって、「娘はいいけど、嫁はいやや」というお母さんもいます。それから、自分が病気をもってても、子どもには言わない。子どもに言ったら、仕事を休んで病院に連れて行ってくれるから、それは迷惑だから、言いたくないということもありますね。

タヴァリ) ブラジル人は年をとったときのことはあまり考えてないような気がします。

尾上) 中国の方、残留孤児の一世はもう既に高齢化しています。60代くらいの方が90代の養父母を介護しているというケースもあります。病院に連れて行くのも大変だし、ことばの問題もあるので、訪問のヘルパーさんや看護師さんに来ていただいたりということを、介護保険の範囲内でおられました。ヘルパーさんで中国語のできる方もおられましたので、すごく重宝がられて、本人さんも安心されていました。そういう(ことばのできる)方がもっと増えないと、ニーズには対応できないだろうなと思っています。

またご夫婦2人で住まれていたり、片方がなくなったりで、1人暮らしの方が増えてきています。それは仕事をしている二世の世代の方と一緒に住むと、世帯収入が上がってしまって生活保護をきられるからなんです。子どもたちも親御さんのことがすごく心配なんですけども、仕事が忙しくてなかなか行けないし、何か急なことがあったら、ことばもできないので、ご本人も、息子さん娘さん

世代の方達も不安に思われているところがありますね。生活保護の制度は制限があって大変なので、今、中国残留孤児の方たちが国を相手に裁判を起こして、生活保護に変わる給付金制度を設けてください、ということ国に要求しています。今年の夏までには、具体的な制度が説明されると思います。

あとは、すごく嫌な話ですけども、介護の問題、老後の問題を解決するために、道具として外国人のお嫁さんをもらうっていうケースもあります。障害を抱えている日本人の男性が、お見合い業者を通じて中国人の若い女性をお嫁さんにもらって介護してもらおうとか、介護の必要なお母さんがいらっしゃるご家庭に労働力としてお嫁さんをもらうとか、中国の残留孤児の一世、二世の人たちが、中国の本土から中国人のお嫁さんをもらうという話をちよくちよく聞きますね。

Q. 通訳などの活動をされるときに、身分や報酬などはどのようになっていますか。

ガ) いろんなところから助成金ももらってやりました。兵庫県の国際交流協会の助成事業は、利用者からは料金はとらないです。ただ、寄付したいとかの場合は、いただいています。でも助成金がない事業の場合は、金額の設定とか、同行する範囲とかも考えないといけないと時期になってまして、どうやっていくのか、わからないですね。年間100件以上行ってるので、途中で「もう行けないよー」とは言えない。当事者負担をどこまでしてもらおうかということは、やっぱり課題にありますね。

タヴァリ) 私は(無償の)ボランティアで行ってますね。

尾上) いろんな立場で通訳に行きますが、大阪府のボランティアという立場で行くときは、大阪府立病院で、1回5000円、交通費込みですね。くろーばーから私が行ったり、派遣をしたりするときの料金体系は、1回1万円で、ご本人の負担能力に応じて、5000円までの減免をしています。仮に依頼者からの負担が0円であったとしても、通訳者には最低3000円は保障するようにしていて、通訳者の持ち出しというのはないようにしています。他の団体にも所属していますが、それは各団体の(財政的な)余裕とかによってかわってきます。

国際交流協会などの通訳ボランティアの場合には、責任が生じると大変だっというのがありますし、ボランティアさんにそこまで過酷なこともさせられないということもあって、病院通訳はしないとか、法律関係の裁判とかの通訳はしない、というガイドラインを設けておられるところが多くて、本当に必要性があるときには NGO にまわってこざるを得ないことがあります。ボランティアで通訳をしたいと言われる方の中にも、人権感覚的にも通訳能力的にもいろんな方がおられるので、その都度、必要なケースの難易度を見極めて、コーディネートするという形をとっています。また、くろーばーの場合は、DV 関係の通訳は、大阪市や大阪府と契約をしてますので、大阪地域で DV の通訳の必要があって病院に行く場合は、担当者の許可が出れば、大阪市の通訳制度を使って、通訳を派遣することもあります。

身分保障はほんとに何もされていなくて、大変です。すごくしんどい内容のもの、例えば差別的な発言の通訳や、ご家族が医療過誤を疑われていて、病院側との話し合いがすごく緊迫したこともありましたし、統合失調症がかなり悪化した人に呼ばれて行ったら、幻覚がかなり出ていて、「あなたも子どもをとりに来たんでしょ、お父さんも取りに来たからナイフを置いてるの」と周りにナイフを並べているというような状況にも遭遇したことがあります。そのようなことがあってから、(精神疾患の方のところには)区役所の担当保健師さんが一緒じゃないと行かないようにしました。それだけ危険な目にあう可能性もある、それなのに身分保障がされていないというのは、怖いなと思いました。

北村) ちなみに、医療機関から支払われたことはありますか。

ガ) 私あります。A市の病院。初めてですね。

でもそのとき連絡してくれた看護師さんに無視されたんですよ。自分が呼んだのに、通訳して終わって、帰って、その間一言もないんです。来てくれてありがとうとか。来て当たり前っていうかんじが、すごいむかついた。自分で助けてくださいって言うてるのに。何もでないなあと思って。そういう命に関わる問題であるので、病院のほうも、真剣に通訳のことを考えないといけないんじゃないかと思います。

